

日中戦争時期中国占領地における将来構想  
——中華民國維新政府指導層の時局観——

関 智英

本論文の目的は、中華民國維新政府について再考することである。維新政府は日中戦争時期の1938年から1940年にかけて南京に存在した。一般にこの政府は、満洲国と同じように日本の傀儡政権の一つと考えられている。論者もこの政府の傀儡政権としての側面を理解している。しかし、もし仮に維新政府が完全な傀儡であったのであれば、政府には存在理由がないことになる。問題は維新政府を傀儡と定義することではなく、如何なる傀儡であったかを明らかにすることなのである。

論者は、維新政府も中国の政府としての側面を持っていたと考える。そのため本稿では維新政府の指導者（梁鴻志、陳羣、温宗堯、王子恵）が成立の目的を如何に定義し、如何なる将来像を描き、また自らの立場を如何に説明したのかを検討したい。実際、日本軍の介入により、維新政府は十分に力を発揮できなかった。しかし、政府に参加した人の中には、温宗堯や王子恵のように、積極的に彼らの政治的立場を表明した人もいた。彼らの文章を読めば、彼らの政見の中に様々な意見があったことがわかる。これは日中戦争時期の中国の政論全体を考える際にも必要な作業である。

こうした主張は、19世紀後半から20世紀前半までの中国の経験（外交観等）に根差したものであった。こうした議論を通じて、維新政府の中国近代史上における意味を知ることができよう。維新政府は親日・反蔣介石・反国民党・反共を主要な政綱としながらも、一方で冷静に戦争を分析し、中国の領土の回復を要求する側面もあった。そのため、維新政府はそれ以前の上海市大道政府と比べると、より中国の独自性を担保することができたのである。

しかし、維新政府の立場は、中国は日本との戦争に負けたということや、反国民党といった点等を前提にしていた。そのため、国民党の汪精衛が1938年末に日本との和平に乗り出すと、こうした維新政府の主張は変更を迫られることになるのである。